

伝えあう喜びのために、ともにできることを

言総研では興味深い数々の講演会を開催していただき、深く感謝しています。学んだことを、支援で出会う子どもたちにどう還元するかは、私たちSTの課題です。

私が教育機関で担当させていただいている相談は、比較的長い期間、一人の子どもと関わることができます。写真は、9年間、担当した高度難聴があるお子さんとの活動で、彼女の音読を母親が聞いて書き取って見比べた時の様子です。成長に応じて様々なチャレンジをしてきました。発音時に舌が口蓋のどの部分が接触しているかが視覚的に表示されるエレクトリックパトグラフィ(EPG)の専門の先生方に相談して、人工口蓋床を作成したこともありました。

彼女は、中3の時に「あのね、ワンちゃん、おはなしきいて」というセラピー犬に音読を聴いてもらうユニークな活動にも参加しました。これは、福岡県が主催したワンヘルスフェスティバルという大きなイベントに組み込まれた企画の一部でした。ワンヘルスというのは「人と動物の健康や自然環境は一つと捉える理念」です。コロナ禍の社会を生きていく上でも重要な考え方で、人と動物との共生社会の実現もその柱の一つのことです。

私はNPO仲間と一緒に、この日の活動に立ち合い、関わることそのものを喜びとする犬たちのコミュニケーション力を目の当たりにしました。日頃、伝わらないもどかしさを味わっている子どもたちは、その分、伝えあう喜びも知っています。感想を聞くと、すごくワクワクして、楽しい体験だったと満足げに話してくれました。読書介助犬は海外での実践はありますが、日本ではまだあまり知られていません。もちろん動物との関わりが言語やコミュニケーションにどのように影響するか等、学術的な研究はこれからです。伝えあう喜びにつながる活動を現場で模索していけるよう、言総研をはじめ学問分野の皆様には、今後ともさまざまな角度からの学術的なご教示やご助言をお願いいたします。

NPO法人ことり 言語聴覚士
今村 亜子

福岡県HPのワンヘルスの解説 <https://www.pref.fukuoka.lg.jp/life/3/21/390/>



人文科学研究院附属 言語運用総合研究センター

スタッフの紹介

増田 正彦 (専門研究員)

専門分野は音韻論・音声学で、特に中国語方言(上海とその周辺で話されている方言)を対象として、声調に関わる現象などを研究しています。中国語の声調は基本的に各音節に平調や上昇調、下降調などということが指定されており、日本語のアクセントとは異なっています。呉方言は、声調が頻繁に交替するということ知られています。言語聴覚士や日本語教師の養成課程で音声学や言語学などの授業を受け持つこともしています。

山本 将司 (テクニカルスタッフ)

現在、人文科学研究院にテクニカルスタッフとして所属しています。専門は統語論、特に疑問詞疑問文に注目して通言語的性質を研究しています。疑問詞疑問文とはいわゆる「5WH」を用いた疑問文のことです。そして、言語を用いたコミュニケーションの中で大きな役割を果たす文形式でもあります。ところが疑問詞疑問文は意外と言語間差異が大きく、そのような違いを英語、ドイツ語、イタリア語などで対照する研究を行っています。

2021年度のセミナー(予定)

日本語教師セミナー

開催日 2022年3月5日(土) 14:00~16:00

講師 山田 智久先生(西南学院大学)

テーマ 教育現場の変化を考える
～これからのことばの教師に必要なこと～

言語聴覚士セミナー

開催日 2022年3月12日(土) 10:00~12:00

講師 大原 重洋先生(聖隷クリストファー大学)

テーマ 障害のある子どもの
ナラティブの発達と支援

Center for the Study of Language Performance

発行日 令和3年 12月 24日 発行者 静永 健

編集発行 九州大学大学院人文科学研究院附属 言語運用総合研究センター
〒819-0395 福岡市西区元岡744 [TEL・FAX] 092-802-5104 [URL] <https://www.2lit.kyushu-u.ac.jp/~cslp/>

印刷 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 [TEL] 092-531-7102 [FAX] 092-524-4411

言総研ってなに?

九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センターのことです。「ことば」に携わる方々と大学とをつなぐ架け橋になることを目指しており、現在、主に次の3種類の職業を意識して講演会やセミナーのテーマを設定しています。

- 言語聴覚士
- 中学・高校等の国語科の教員
- 日本語教師



大学の研究を教育・医療の現場へ

言総研通信

Vol.2



「まことにこころ苦しいのですが……」

本日で閉店させていただきます。」という張り紙を、今日も一つ見つけてしまった。

このご時勢ゆえ、ただただ「仕方ないねえ」とため息をつくばかり。あの、気さくで笑顔の人懐っこい感じの店長への同情の気持ちに加え、私自身にも、胸の奥にポツカリと、また一つ、ちいさな穴があいてしまったような気がした。何しろ、その店には、大学院生だった頃からの、かれこれ30年近い思い出が詰まっていた。

そんな暗澹たる帰り道、たいへん不謹慎なことだが、この「こころ苦しい」という言葉に考え込んでしまった。「こころ苦しい」と単なる「苦しい」とは、いったいどのように違うのだろうか? 苦しみの強さは? また相手(=お客)に対する気持ちと、本人が直面している現在の状況とは、どちらが重いのか? いや、とにかくこんなことになって、店長は今、何を考えているのだろうか? 一日も早く、気持ちを切り替えて、彼の第二の人生を皆で応援してあげたいものだ……とか、奇妙な妄想に取り憑かれたまま、家にたどり着いた。

そもそも「こころ+〇〇〇〇」という言葉は、日本語の中にいったいどのくらいあるのだろうか。岩波「広辞苑(第7版)」では、1043頁の2段目から1049頁の2段目まで、まるまる6頁にわたって見出し語が並んでいる。また小学館「日本国語大辞典(第2版)」になると、第5冊(け〜さ)の657頁から706頁、見出し語の数は1000を超え、ゆうに文庫本1冊分の量がある。ことほど左様に、こころと言葉の関係はまことに緊密で、まさに「人のこころを種として、よろづの言の葉とぞなれりける」とは何たる名言であろうか。

「こころ苦しい」と単なる「苦しい」とには、本当にどのような区別があるのでしょうか。こころ当てに、あれこれと想像できる場面を考えてみるのだが、私ひとりでは幾らこころを砕いても、いささかこころもとない。

みなさんはどう思われますでしょうか? 機会があれば、どうぞこころ置きなく、そのおこころに浮かんだものをこころよくお聞かせください。

さて、言総研通信の第二号をお届けします。今回も、人文科学研究院特定プロジェクト教員から偶然にも同姓のシャルレーヌ・クロンツ先生(仏文学講座)とテッド・クロンツ先生(英語学・英文学講座)、また言語聴覚士でNPO法人を立ち上げておられる今村亜子さん(言語学講座OB、博士(文学)号取得)よりご寄稿いただきました。ありがとうございます。

2021.12.21

九州大学大学院人文科学研究院 中国文学講座教授
附属言語運用総合研究センター長

静永 健



世界=文学:相互文化性、 かけがえのない財産

ヴィクトル・セガレン¹、ゲラシム・ルカ²、福永武彦³、関口涼子⁴の共通点は何だと思いませんか？ 一見すると何も共通点はないようですが、実は皆、自文化以外の文化に魅了された作家なのです。自分とは違うものや自分とは根本的に異なるものに対し、自身の文化や個人的な経験のフィルターを通して知覚しているのです。二つ以上の文化の間を行き来するということは、実際、現状のようなグローバル化した世界で私たちが絶えず意識してやまない、かけがえのない財産となります。私が愛してやまないフランス文学、そしてその周辺圏の文学を教えることもその良い例でしょう。これは相互文化性 (interculturalité) — 少なくとも二つの文化が出会い、新たなものを生み出すこと — と呼ばれるものです。ただし、そのような交流は、自分たちと根本的に通じ合うことのない、遙か遠い場所のものを優先して自分自身を失ってしまうことを意味しているわけではありません。むしろ、こうした交流は他者の核心を成すものの中に自分自身を再発見することを可能にすること、それよりも示唆に富むような、人間を映す鏡が果たしてあるのでしょうか？

この四人の作家の著作が長く読まれていることこそ、そのことの証拠なのです。すなわち、未知なるものとの遭遇は、私たちが生きるこの世界をよく理解するために不可欠であるということです。この世界について知れば知るほど、世界の一員であることを実感し、世界をより快適に感じられることでしょう。交流を恐れることもなくなり、眠りを誘うようなひどく心地のよい繭の中に閉じこもることもなくなるでしょう。他国で使われている生きた言語 — 例えばフランス語のような — に精通していることは、もちろんビジネスにおいても不可欠なコミュニケーションツールとなるのですが、同時に相手のことを知るための媒介手段ともなり得るわけです。さらに言えば、「生きた言語 (langue vivante)」という表現における「生きた」という形容詞こそが、言語に精通することによって、生きているものをよりよく表現できるようになるのだと明らかに示しているのです。また、でき得る限り好意的に、偏見を交えず、未知なるものに関心を持つことで、ゲラシム・ルカの言う「生き生きした生 (vie vivante)」を私たちのうちに培うことができます。ゲラシム・ルカの著作は、ヨーロッパやその向こう側の中で確立した文学的・芸術的なネットワークの力について、強大なイメージを与えています。より身近な例で言えば、関口涼子の文学における往復は、彼女の住むフランスと日本の間で行われ、食、詩、芸術や時事問題についての相互的な視座を生み出しているのです。

それゆえ、バベルの塔の神話はある事実を際立たせているといえます。それは、大衆をコントロールしたいと望む人たちの手によって、文化交流は時に脅威とみなされるのだ、という事実です。しかしながら、文化交流は私たちがより強くし、数々の困難に直面する中で人々を結びつけて



九州大学大学院人文科学研究院
仏文学講座 准教授 (特定プロジェクト教員)

シャルレーヌ・クロンツ

Clontz, Charlène

くれます。また、壁を築いたり、超えることのできない境界線を築き上げる動きに対抗できるものもあります。そうすることで、人間同士の間に橋を架け、私たちの内に好奇心が呼び覚まされ、その結果、私たちは機械などではなくプレーズ・パスカルが言うところの「考える葦」として在るよう、駆り立てられるというわけです。2018年から福岡に暮らす一人のフランス人として、私は毎日、驚きと喜びを感じています。それは、この場所での出会いのすばらしさ、また同時に (まったく無邪気に、というわけでもなく) 日本での新たな生活に感じる思いがけなき、蓄積された知の複雑さと豊かさ、自分自身の視野の広がり、そしてすべてが最良の方向へと向いていることに対して、日々感じている驚きと喜びなのです。(訳:河田 典子)

¹ヴィクトル・セガレン (プレスト1878 — ユエルゴア1919)。医師であり詩人。中国に滞在し、現地の考古学調査を行った。

²ゲラシム・ルカ (ブカレスト1913 — パリ1994)。ルーマニア語、イディッシュ語、フランス語、ドイツ語を話した。当初はルーマニア語で執筆していたが、後にフランス語を用い、その後フランスに移住。ルーマニアのシュルレアリスム芸術家グループを牽引した。

³福永武彦 (筑紫野1918 — 軽井沢1979)。詩人、小説家であり翻訳家としても名高い。フランス語およびフランス文学を学び、数々の小説を出版した。

⁴関口涼子 (東京1970 —) 作家、翻訳家。同じくフランス語およびフランス文学を学ぶ。現在はフランスに在住している。



今年度は、身体や身体表現、空間的位置表現についての語彙を学び、その後、希望した学生は、学期の終わりに、クロンツ先生が指導されるフランス語のヨガ教室に参加しました。ラテン語の格言「健全な精神は健康な肉体に宿る」を実践し、楽しい時間を共に過ごすことが目的でした。

一冊の本と一つの質問

今学期は、トマス・ピンチョンの長編第一作『V』を再び教えることとなった。しかし、これは単に話のきっかけに過ぎない。授業は、ある学生のこの小説に関係するかもしれないとも言える質問で始まった。その質問とは「疎外」について、そして二十世紀文学におけるその立ち位置についてのものだった。

現代の人が感じる「疎外」とは、時代を遡ると産業化、またそれに伴う都市化と結び付けられる。マルクスが述べているように、近代産業は労働者を仕事から「疎外」することとなった。それは、労働者が自分たちが作ったものに対してコントロールが及ばなくなるということであり、さらにいえば出来上がった製品を見ることさえもなくなるということである。「モダニティ」という語感について論じたマーシャル・バーマンの著書によると、マルクスは自身が体感したモダニティ、それに加えてポストモダニティの経験を、「堅牢なものは悉く気化す」— これはバーマンの本のタイトルでもあるが — という一言でもって実によく捉えている。したがって、歴史的に言えば、学生の質問への答えを探すには、二十世紀の「疎外」とは文学やその他の場所に現れているがゆえに歴史的なプロセスの一部だということとを考慮すると、その起点にたどり着くには一世紀、あるいはそれ以上遡らなければならない。しかし、これもまた本題ではない。

数年後、フロイトが登場し現代思想に大きく影響を与えた。1950年代にはマルクスとフロイトの思想を融合した二冊の本が出版された。マルクーゼの『エロスの文明』とノーマン・O・ブラウンの『エロスとタナトス』である。この二冊はどちらもその後二十年にわたって大きな影響を与え続ける。その影響とは、この二冊が、多くの人が1960年代といえれば思い浮かべる思想の典型、すなわち「若者の反抗」、「自由恋愛」といった思想を作り上げたのだという人もいるくらいだ。そして『V』とは別のピンチョンの著作である『重力の虹』の中に、マルクーゼはともかく、少なくともブラウンの影響は見出すことができる。このエッセイの主旨に入る前に、もう一人の名前に言及しておく必要がある。それはノーバート・ウィーナーと、サイバネティクスに関するその著作である。ソーシャルエントロピーとコミュニケーションエントロピーについての彼の



九州大学大学院人文科学研究院
英語学・英文学講座 准教授

テッド・クロンツ

Ted Clontz

思想、および機械についての彼の著作は、ピンチョンが常にウィーナーに賛同していたかどうかはともかく (これは様々な解釈が可能だ)、若きピンチョンに大きな影響を与えた。

ここであげた思想の全て、あるいはもっと多くの思想が西洋思想や、モダニティとポストモダニティ— もし両者の間に本当に違いがあるとするならばだが — それらを人間が経験して行くプロセスの一部としてしている。ピンチョンの長編第一作には、たとえ間接的にはあっても、これら全てがある程度存在している。この小説は、そして他の小説も、ある一時点で書かれており、したがって静止したものだと考えることができるだろう。しかし、その創作へと導いた、社会的、歴史的、そしてある種の科学的なプロセスでさえも、小説と共に止まってしまうのではなく、ゆえにその作品は当時を写した写真として読むことができる。それだけでなく、六十年以上前に存在したテクノロジーと人間社会についての問題は未だに継続中のプロセスの一部なのだ。ならば、一冊の小説は、文学的な価値を求めて読むだけでなく、その創作に通ずるイデオロギー的な思索のプロセスや、その小説が書かれた当時から今へと流れ続けている時間の中から輪郭をかたどって示す「疎外」に代表される時代の風潮を求めて読むこともできるのだ。(訳:川村 真央)



シャルレーヌ・クロンツ先生とテッド・クロンツ先生の原文の原稿は、言総研のホームページからご覧いただけます。(それぞれフランス語と英語)

